

幕末に開国し、明治維新になると外国人が全国を自由に往来できるようになった日本。鎖国時代は、限られたオランダ人や中国人・朝鮮人しか目撃できなかった日本の国土やさまざまな産物でしたが、新たな外国人たちの目によって、急速に日本が発掘されていきます。有名なのは、

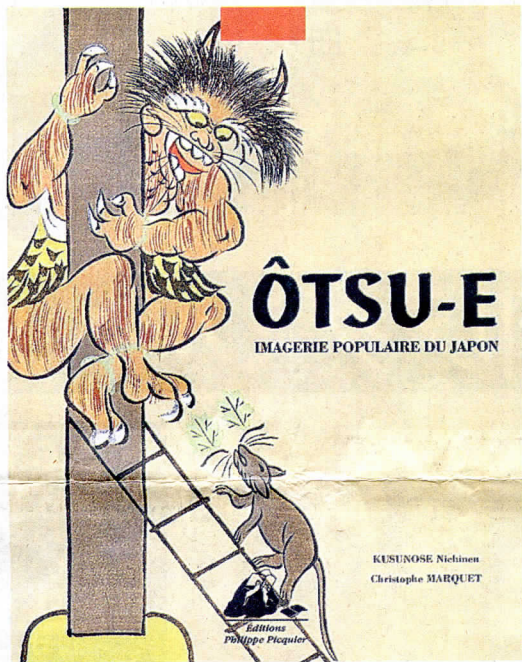
フランスに渡る鬼たち

見たモースでしょうか。実は大津絵も、すでに明治前期から来日フランス人によって注目されており、その伝統は今もってなお健在で、今月には大津絵研究の最新成果と新発見が、日仏会館所長のクリストフ・マルケ氏の著作『OTSU-E IMAGERIE POPULAIRE DU JAPON』(仏文)によって示されました(同書は楠瀬日年「戦前の篆刻家で大津絵好事家」の大津絵画題集「大津絵図帖」全体も収録)。以下、同書を参照すると、まず、早くも1876(明治9)年には、パリ・東洋美術館の創立者であるエミール・ギメが、鬼の念仏(木彫)を本国へ持ち帰り、同館に収蔵しま

した。宗教調査で来日した彼は、僧形像とも鬼神像とも言えぬ、宗教彫刻とも違う、何ともけったいな彫像に、してやられたに違いありません。その後、フランス人では1937~39年、有名な先史学者、アンドレ・ルロワグーランの民俗学調査における大津絵調査が注目されます。彼は、約100枚の大津絵画題の調査を作成し、うち30枚ほどは画像の縮写もしています(加えて、数点の肉筆大津絵および楠瀬日年の大津絵版画集も収集)。恐らく、この熱心さは、長期の京都滞在中に交流した河井寛次郎(柳宗悦の盟友)から大津絵を含めた民芸の魅力を説かれたためでしょう。そんな彼は、ギメ美術館(同館は2点の大津絵青面金剛を収蔵)で民画展を企画したものの戦争で断念。戦後の47年8月に彼が副館長を務めていたパリの人類博物館で小さな民芸展が行われ、収集した大津絵を少なくとも3点展示しています(ただし20世紀に描かれた大津絵。現在はケ・フランリ美術館蔵)。その後、本格的な江戸時代の

横谷 賢一郎

心さは、長期の京都滞在中に交流した河井寛次郎(柳宗悦の盟友)から大津絵を含めた民芸の魅力を説かれたためでしょう。そんな彼は、ギメ美術館(同館は2点の大津絵青面金剛を収蔵)で民画展を企画したものの戦争で断念。戦後の47年8月に彼が副館長を務めていたパリの人類博物館で小さな民芸展が行われ、収集した大津絵を少なくとも3点展示しています(ただし20世紀に描かれた大津絵。現在はケ・フランリ美術館蔵)。その後、本格的な江戸時代の



『OTSU-E IMAGERIE POPULAIRE DU JAPON』(仏文)によって示されました(同書は楠瀬日年「戦前の篆刻家で大津絵好事家」の大津絵画題集「大津絵図帖」全体も収録)。以下、同書を参照すると、まず、早くも1876(明治9)年には、パリ・東洋美術館の創立者であるエミール・ギメが、鬼の念仏(木彫)を本国へ持ち帰り、同館に収蔵しま

マンガ・アニメ 造形の原点を発掘

大津絵の展示が、パリのオースティ画廊(閉廊)で62年に行われ、29点の大津絵が図録に収録されています。日本でも大津絵が希少となっていた戦後で、これはかなりの規模の展示と言えます。

そして近年、2012年には、パリ日本文化会館で「笑いの日本美術史」展が開催され、9点の大津絵が出陳。展覧会のポスターと図録の表紙を、大津絵の「鬼鼠柊」が独占しました。

このように、フランスでは、明治時代から大津絵に熱いまなざしを注ぐ人たちがいてくれたのです。パリのジャパンエキスポでも、マンガ・アニメが大人気ですが当然です。大津絵を愛するお国柄なので、会場を大津絵キャラのコスプレで練り歩き、マンガ・アニメの造形の原点ここにありと知らしめたものです。(大津市歴史博物館学芸員) 毎月第3土曜日に掲載します。



①ギメ美術館の鬼の念仏立像②マルケ氏著「大津絵」表紙③「笑いの日本美術史」展図録表紙(主催・国際交流基金)

